

くことは、ある意味、ミステリーや推理小説を読む作業に似た営みであるかも知れませんが、この教科書展を通じて、「研究」の面白さの一端を体感していただければ幸いです。

I 「いろは」で学ぶことと、「あいうえお」で学ぶこと

I-1 現行の国語教科書から

まずは、現代の国語教科書を確認するところから始めましょう。

ここに展示してある**小学校 1 年生の国語教科書**をどれでも開いてみてください。最近の小1の教科書の冒頭部は、まるで絵本と見紛うばかりですが、基本的な単語を学んだ後に、「ひらがなのひょう」として、「あいうえお」が登場します。いまではこれが「当たり前」なのですが、先に述べたように、少なくとも明治中期までは、そうではなく、「いろはうた」に拠っていました。

今回の教科書展では、古い教科書を手取る前に、まず、言語学習の初歩が「あいうえお」であることと、「いろはうた」であることでは、どのような違いがあるか、確認してみましょう。**中学 1 年生の国語の教科書**も展示しておきましたが、この教科書には古典の世界への導入として「いろはうた」が掲載されています。この「いろはうた」の意味を、まずは確認してみてください。

I-2 「いろはうた」の意味

確認していただいたように、「いろはうた」は、わが国の仮名文字 47 文字を 1 回ずつ使って、一続きの意味をもった文章となるように構成されたものです。作者は教科書にあるように不明で、弘法大師空海が創ったという説もあります。「いろはうた」は、簡単に言うと、「無常観」（世の中は常に一定ではないということ）を表しています。中学で「平家物語」を学習したときに、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり…」という文言を暗誦したという人も多いのではないかと思います。これも「無常観」を表したものとして知られています。この教科書展を見ていただくにあたって、押さえておいていただきたいのは、「無常観」はもともと仏教が説いているものであったということです。なぜこんなことが大事なのかは、あとのお楽しみに…。

ちなみに、「いろはうた」を 7 文字 1 行として区切り（1 行目は「いろはにほへと」、2 行目は「ちりぬるをわか」となりますね）、各行の 7 文字目だけをつなげると「咎（とが）なくて死す」となります。このことから、「いろはうた」は、冤罪で亡くなった人（柿本人麻呂だともいわれます）の恨みの暗号が込められたうたであるという説もあります。

I-3 「いろは」で学ぶか、「あいうえお」で学ぶか

近世期までは、民衆は「いろはうた」に拠って言語学習を開始していました（近世期の教材を今回展示することはできなかったのですが、近世期の子どもの言語学習階梯が示された**辻本雅史『教育の社会文化史』**（放送大学教育振興会）の一部を展示しておくので、ご覧ください）。一続きの意味をもった文章であることと、「日本人」に馴染みのある七五調のリズムが、暗誦を容易にしていたことが、「いろはうた」が広く用いられていた一つの要因だと考えられます。一方今日の私たちは「あいうえお」を用いているわけですが、こちらは母音と子音の組み合わせが規則的に並んでいるので、「正しい」発音を学ぶにはよいのだと思われます。ただし、「いろはうた」のように、「あいうえお、かきくけこ…」自体には意味がないので、暗誦するには「いろは」よりは適さないですね。ただ、「あいうえお」から学ぶことによって、濁音や半濁音、また、たとえば「おもちゃさん」と「お

もちややさん」のように、拗音をきちんと学習することができます。

II その時、歴史は動いた？：転換点の言語教科書

このスペースでは、まず、明治初年の言語教科書（「国語科」が成立するのは 1900（明治 33）年なので、こう呼んでおきます）をご覧ください、その後で、「いろは」が「あいうえお」に転換する決定的な教科書をご覧くださいと思います。「いろは」が「あいうえお」に変わるまでの複雑な動きを時系列的に追うのではなく、最初に歴史が動いた「その時」に立ち会っていただこうというわけです。

II-1 明治初年の言語教科書二つを見比べてみよう

明治初年の教科書は残念ながら当館に所蔵がないので、『小学読本便覧』（古田東朔編、武蔵野書院）に復刻されている『小学教授書』と『小学入門』（いずれも文部省編）をみましょう。まずは『小学教授書』を手にとってみて下さい。これは 1871（明治 6）年 5 月の刊行ですが、いわゆる「学制」が公布されたのは 1872 年 5 月ですから、まさに近代教育の出発点でつくられた教科書です。

表紙を開くといきなり五十音図が載っています。しかも、ヤ行のイとエ、あるいはワ行のウなど、現代では使われていない不思議な文字も載っています。今ではア行とヤ行のイとエは同音だということになっていますが、『小学教授書』では、おそらく別個の音だと考えられていたから、別々の文字が使われていたのでしょう。この本は「教授書」の名の通り、先生向けの指導書のようなもので、子どもが使ったものではありませんが、これまでわが国において言語学習の初歩と言えば「いろはうた」であったはずなのに、この『小学教授書』には、どういうわけか、「いろはうた」はまったく出てきません。

さて、もう一つの『小学入門』にいてみましょう。こちらは『小学教授書』を実際に学校で使うよう「改訂」したものだといわれています。『小学教授書』は、表紙を見るとその刊行は「明治 6 年 5 月」、この『小学入門』は「明治 7 年 10 月」ですから、編集時期に大きなずれはありません。にもかかわらず、『小学入門』は、「いろはうた」で始まっていて、五十音図はその後に掲載されています。なぜ、僅かな刊行時期のずれが、このような大きな違いをもたらしてしまったのでしょうか。その歴史的背景には、後ほど迫りたいと思います。

II-2 「いろは」にとって運命的な年、1886（明治 19）年：『読書入門』の登場

次に展示する『読書入門』（よみかきにゅうもん）は、1886（明治 19）年に刊行された、尋常小学科 1 年の前期に使用することを前提に編集された言語教科書です。1886 年というのは、今回の教科書展にとって重要な年号です。国語学者の小松英雄は、その著『いろはうた』のなかで、1886 年を「いろは」にとっても、「あいうえお」にとっても「運命的な年」だったと評しています。ちなみにこの年は、教科書検定制が採用された年でもあります。これまでは既刊の教科書の適否を判断する開申制や認可制が採られてきましたが、検定制の導入により、教科書内容の規制はより強くなっていきます。

ただ、当時の文部省（当時の文部大臣は森有礼）は、教科書の内容を統制するというよりは、教科用の図書として問題がないことを確認できればよいという程度に検定を消極的に考えていたようで、『読書入門』は、検定制の採用に伴い、「こんな風につくってみたら」という感じのモデルとして文部省が編集した教科書でした。

では、『読書入門』を開いてみましょう。ご覧いただければわかるように、冒頭はいく

つかの単語の学習に始まり、そのあと、五十音図が掲載されています。この順序、平仮名が片仮名である以外は、現代の国語教科書と同じですよ。この教科書は、近代国語教科書のスタイルを決定づけたものとして位置づけられています。ちなみに、片仮名先習が平仮名先習に変わるのは戦後になってからです。ちなみに、なぜ『読書入門』が片仮名先習なのかは、冒頭に書いてあるので、時間のある人は、探してみてください。

調べてみると、『小学教授書』で五十音図、『小学入門』でいろはうたが冒頭に載るといふ錯綜の時期を経て、言語教科書の多くは、しばらくの間「いろはうた」が冒頭に掲載されるというスタイルを採っていたようです。それが、『読書入門』になると、突然五十音図が冒頭に載り、「いろは」のほうは、『読書入門』のように、巻末付録のような形で載せられるようになります。『読書入門』以後の言語教科書で、当館に所蔵しているものも展示しますので、手にとってご覧ください。ほとんどが『読書入門』と同じスタイルになっているはずです。

明治初年の錯綜期を経て、「いろはうた」優位できていたのに、なぜ1886年に突然、「あいうえお」が優位になり、それが確立することになってしまったのでしょうか。残念ながら『読書入門』にその理由は明示されていませんし、編集に携わった人が書き残したものもありません。私たちはこれから、明治初年から1886年までの間に何があったのか、一体どのようなことが「いろは」→「あいうえお」転換の要因になったのか、このミステリーを探る旅（ちょっと大げさ？）に出発してみたいと思います。

Ⅲ 明治初年の言語教科書における五十音図の使用と 「いろはうた」衰退の背景

Ⅲ-1 国学者も洋学者も五十音図が大好き？

では、このミステリーを解く手がかりとして、明治初年の錯綜期に立ち戻って、これらの教科書をどういった人々がつくったのか、ということを考えてみたいと思います。

おかしな「イ」の文字が掲載されていた『小学教授書』は、洋学者の田中義廉らが中心になって編集したと言われています。国学者も編集に参加していたようですが、中心は洋学者だったようです。明治初年は、国学者と洋学者が今で言う「派閥争い」を繰り返していた時期でもありました。どちらが政治の中心に立つかをめぐって争っていたわけですね。すなわち、西洋の学問や考え方を積極的に入れていこうという洋学者たちと、本居宣長以来、「日本的」なものの考え方ややまとことばの発見をめざす研究をしてきた国学者たちと、どちらがこれからのわが国を担うイニシアティブをとるかが焦点になっていたのです。

本居宣長は、近世期に「五十音図」を確定させた人物として知られています。宣長以前も五十音図はありましたが、宣長は古代のことばを調べて、当時、それぞれ「あいうえを」「わいうえお」だったア行とワ行「を」と「お」の所属を入れ替えて、現代でも使われている五十音図に確定させたのです。宣長以後、国学は平田篤胤らが発展させますが、論調の激しいものになると、五十音図は天地創造以前から存在したという説も唱えられるようになります。それが、幕末の攘夷派に接続していきます。

だとすると、五十音図を使うのに強いこだわりを持つのは国学者であって、なぜ洋学者が中心となってつくった『小学教授書』の冒頭が「あいうえお」なのでしょう。それは、近世期にわが国が「鎖国」（海禁政策）していた時代、長崎の出島でオランダなど一部の国との貿易が許されていましたが、当時の蘭学者たちがオランダ語を学ぶのに、また出島にやってきた外国人が日本語を学ぶのに、ローマ字で書かれた五十音図を使っていたからです。洋学者たちにも、五十音図に親しんでいたという素地があったわけです。そのため、

洋学者がつくった『小学教授書』も、西洋の言語教科書に倣い、日本版アルファベットとして、五十音図を位置づけていたのではないかと考えられます。

ただし、「洋学者」と呼ばれていた人のすべてが、言語学習の初歩は五十音図であるべきだと考えていたわけではありません。かの、一万円札の肖像に使われている福沢諭吉（1835-1901）は、近代的個人の確立を説いたことでも知られるように、西洋の思想や理論を積極的にわが国に導入しようとした人物です。

ですが、福沢は一貫して「いろは」を支持します。当館に所蔵がないのでコピーを展示しますが、「**小学教育の事**」（出典は『福沢諭吉選集』12巻、岩波書店）では、いろはを知らなければ下足番もできない、と述べています。五十音図はあくまで「サイエンス」であり、人々の日常生活に役立つもの＝「知識」は「いろは」だというわけです。古くは近世期にかの大岡越前が創設したと言われる江戸市中の火消し「いろは四十七組」をみてもわかるように、私たちはものを数える方法として、伝統的に「いろは」を用いてきたのです。だから、「人間普通日用に近き実学」を重視してきた福沢にとっては、私たちの日常生活に直接役立つ「いろは」をまず学習すべきであると唱えたのです。ほかにも当館所蔵の『福沢諭吉全集』19巻に載っている「**学校之説**」には、ABCと「いろは」が同列に扱われている記述があることがわかりますが、このことから、彼が日本版のアルファベットは「いろは」だと考えていたことがわかります。福沢が「いろは」支持者だったことは、よく覚えておいてください。あとでもう一度出てきますから（ここに戻ってきていただかなければならないのですが、すみません）。

Ⅲ-2 王政復古が叫ばれたとき、「いろはうた」は地位を失った？：神仏分離と廃仏毀釈

福沢諭吉は別にして、明治初年の洋学者も国学者も五十音図を「いろは」よりも優位に考え、『小学教授書』に五十音図を掲載したのでしょうか。ですがこれは、「五十音図を載せよう！」ということになった裏づけはとれても、「『いろはうた』はやめよう」と彼らが考えたことの裏づけにはなりません。何しろ私たちは、近世期まで「いろはうた」で言語学習を始めていたわけですから、明治初年に至っていきなり教科書から「いろはうた」を外してしまうのには、相当勇気が必要だったはずです。にもかかわらず、なぜそれができてしまったのか？そこには、「いろはうた」は教科書に使えないと思わせるだけの何らかの背景があったのではないかとと思われるのです。ということで、ここで考えてみたいのは、簡単に言うと、「いろは」がダメになった理由です。

その理由としてこの教科書展でとりあげたいのが、神仏分離と廃仏毀釈です。わが国では仏教伝来以来、神と仏を一緒にして信仰する習慣がありました（神仏習合）。ですが明治新政府がいわゆる神仏分離令を公布して、神道と仏教を区別することを民衆に求めました。これは単に神と仏を区別せよ、という通達だったわけですが、これをきっかけにして、お寺の仏像が民衆によって破壊されるという、いわゆる廃仏毀釈運動が起きました。有名なところでは、奈良の興福寺にある国宝の阿修羅像も一度この廃仏毀釈で破損しています。現在興福寺にある阿修羅像は、岡倉天心の手で修復されたものです。

このことと「いろはうた」に何の関係があるの？と思うかも知れません。ですが、「いろはうた」がもともとどんな内容のうたであったのかを思い出してみてください。そう、「いろはうた」は、仏教的無常観をうたったものでした。いわゆる仏道歌だったわけです。明治初年の教科書から「いろはうた」が一時消えた理由は判然とはしませんが、神仏分離と廃仏毀釈が大きく関わっているのではないかと、推測することができます。

ここに展示する『新聞集成 明治編年史』第2巻、民論勃興期（財政経済学会、1934年）は、明治期の新聞記事をテーマごとに集約した書物ですが、このなかに、大阪新聞の1873年6月5日付の記事「**此にも廃仏毀釈：戸籍の編制にいろは順廃止**」というものがありま

す。この記事によると、「いろはうた」は「仏因果悟道之歌」で、この文明開化の時代には合わないから、五十音順に改めることにしたということが書いてあります。戸籍がいろは順だったというのは、今の私たちにはびっくりな事実ですが、「いろはうた」が仏道歌であったということは、人々に馴染んでいた「いろはうた」が日常生活から次第に離れることになった大きな要因ではないかと思われまじ、『小学教授書』から「いろはうた」が消えたのは、この影響の具体的な事例の一つであるとも言えるのではないのでしょうか。

さらに、私たちにとって興味深いのは、1年も経たないうちに『小学入門』で「いろはうた」が「復活」してしまっていることです。廃仏毀釈の影響で「いろはうた」の地位が揺らいだことによって、そして日本版アルファベットという位置づけをもって、「五十音図」が言語教科書に導入されたにも関わらず、すぐに元に戻ったというのは、それだけ人々の生活に「いろはうた」が馴染んでいて、一朝一夕に変えられるものではなかったということを示しているのではないのでしょうか。

IV 国語辞典が五十音順になるとき：大槻文彦編『言海』の編集をめぐる

IV-1 『舟を編む』の玄武書房辞書編集部がしていない大槻文彦の苦勞

戸籍が「いろは」順から五十音順に変わった、となれば、今の私たちの生活で「五十音順」になっているものとして馴染みがあるのは、国語辞典ですよね。実は、わが国初めての近代国語辞書の編纂が行われた時期と、「いろは」が「あいうえお」に転換する時期は、偶然にもほとんど一致します。ここでは、国語辞典『言海』の編纂過程をめぐる謎と、出版後改版された『言海』のある修正点に注目してみたいと思います。なぜ『言海』が近代的なのかということ、その一つは、索引が五十音順になっているということが挙げられるでしょう。それまでは「節用集」といって、現在の国語辞典に該当するものは、いろは順で編集されていました。とても引くのが面倒だったと思うのですが、当時の人々にとっては、それが「当たり前」だったわけです。

さて、突然ですが、2012年の本屋大賞第1位になった、三浦しをんの『舟を編む』（光文社）をお読みになったでしょうか。本学に所蔵があるので展示します。よかったら手に取ってみてください。この小説も、現代の話ですが、ある出版社で辞書を編集する人々の苦闘を描いています。「恋」の意味が時代によって異なるというエピソードも用いられていて興味深いですが、近代最初の本格的国語辞書と呼ばれる『言海』の編集で抱えることになった苦闘は、『舟を編む』に出てくる玄武書房の皆さんの苦闘の比ではなかったのではないかと思います（玄武書房の皆さん、ごめんなさい！）。

なぜかということ、『言海』を編集した大槻文彦（1847-1928）は、まず、「分類」の手段から自分で開発しなければならなかったからです。辞書を作るとき、まずはある単語が名詞なのか動詞なのか副詞なのか、それとも形容詞なのか、などと分類しなければなりません。また、たとえば、ある動詞が上二段活用なのかサ行変格活用なのか、などということも分類しなければなりません。大槻が『言海』を編集した時代には、まだ品詞分類や文法自体が確立していませんでした（動詞の活用については、本居宣長の子、春庭が用言の活用を『詞八衢』で、現代とほぼ同じ活用表をつくりました）。

明治初年は西洋の文法を模倣したような文法書が出るのですが、明治中期あたりからは、西洋の文法と国学の文法研究の成果が折衷された文法書が出るようになります。大槻文彦も蘭学者である大槻玄沢の孫ですから、洋学の系譜にあるのですが、洋学と国語学を折衷したような文法を自ら開発します。ここに展示してあるのは、『言海』の第41版（1898年4月刊）ですが、辞書を開くと、不思議なことに「語法指南」という文法の説明から始まり

ます。そう、私たちは辞書を引く前に、品詞の種類とか、動詞の活用とかを学んでおかなければならなかったのです。この「語法指南」はのちに文法書として独立して出版されます。当館には、大槻の著した『日本文典初歩』（1897年）、『日本文典』（1897年）、『日本文法教科書』（1900年）を所蔵しています。これらも手にとってご覧ください。次のコーナーでは、当館に所蔵している同時代の文法書も展示しますので、手に取ってみてください。

もう一つ、玄武書房の辞書編集部が苦勞せずに済んだ点は、お金の面です。当初『言海』の刊行にあたっては、国からお金が出るはずだったのですが、大槻は結局『言海』を自費出版で刊行せざるを得なくなりました。彼は1889年から1891年にかけて、4分冊にして初版を刊行するのです。1889年ということは、『読書入門』が出てから3年後ですね。

IV-2 大槻文彦の迷い：いろは順か、五十音順か？

国語学者の山田俊雄が「『言海』の草稿の表紙についての調査報告」（『成城国文学論集』12、1980年）という論文を書いているのですが、これによると、大槻家から発見された『言海』の草稿（「あ」「い」「う」…というカテゴリーでまとまっていた）を、表紙に記された編集日順に並べてみると、ほぼいろは順で並んでしまったことを明らかにし、大槻は当初五十音順ではなく、いろは順で『言海』を編集しようとしていたのではないかと推測しています。そうすると、大槻の中で、「いろは順」から「五十音順」に変わった何かがあったのです。大槻は『言海』の「索引指南」の中で、国から命を受けて11年あまり、索引の方法を模索してきた大槻が五十音順を決定したのは、まさに『読書入門』の刊行された時期と、軌を一にしているのです。

そうすると、『読書入門』の編集者も、『言海』を編んだ大槻も、この時期、五十音順を用いることになんらかの自信のようなものを得たのだということになります。それが何だったのか、残念ながらこの教科書展では「答え」をお示しすることができません。いくつかの推測を示すにとどめざるを得ないのですが、1886年前後、五十音図の地位が「いろは」に比べて優位に立ったということは、確かなようです。

ちなみに、石山茂利夫の『国語辞書事件簿』（草思社、2004年）によると、1890年12月16日から電話業務が始まりましたが、電話番号簿が初めてできたのは1898年だったそうです。それで、この電話番号簿は最初いろは順で、1925（大正14）年にやっと五十音順になったそうです。このことは、先の『小学教授書』→『小学入門』の事例と一緒に、いかに「いろは」から「五十音図」に転換させるといっても、そもそも「いろは」が定着している民衆の側からすれば、そんなに簡単に生活に根づいているものを変えられるものではない、ということを示した事例だと思えます。

この事例は、『言海』においてもみることができます。先ほど見ていただいた『言海』第41版の表紙を何枚かめくって、漢文で書いてある「言海序」の手前のページをみてください。このページは何も印刷されていない、空白になっていますよね。

では、となりに展示した、ちくま学芸文庫で復刻された『言海』を開いて、同じ所を確認してみてください。このちくま学芸文庫版は、奥付を見ればわかるように、1931（昭和6）年刊行の628版が底本になっています。ですから、先の41版よりもずっと後に改版されたものなのですが、このちくま版には、41版で空白だったページに、五十音索引といろは索引がつけられています。『言海』は初版から何回かの改版を経た後、この索引のページが追加されました。当初五十音索引で刊行した『言海』のはずが、しばらくすると「いろは索引」も追加せざるを得なかったのは、やはり辞書を使う当の民衆の側が、五十音順というインデックスに慣れていなかったということを示しているのではないのでしょうか。ちなみに、先の石山の『国語辞書事件簿』によると、1926年に東京逓信局が「いろは順とあい

うえお順のどちらを支持するかというアンケート調査を行ったところ、81%の人がいろは順を支持したそうです。明治以前に生まれた中高年の人々が調査対象ですから、この結果は当然と言えば当然ですが、昭和に入ってもなお、「いろはうた」は人々の間に根強く残っていたのだと言えるでしょう。「教育」の場で、「いろは」が「あいうえお」に転換しても、それが実社会に反映されるまでには、相当の時間がかかるということです。

IV-3 大槻文彦と福沢諭吉

最後に、『言海』をめぐる興味深いエピソードを紹介しておきましょう。

大槻文彦が『言海』を刊行した後、1891年、福沢諭吉が主幹をしていた雑誌『時事新報』に、「大槻磐水先生の誠語その子孫を輝かす」という福沢諭吉の記事が載ります。ちょっと戻っていただかなければならないのですが、III-1のスペースに展示した、『福沢諭吉全集』第19巻（岩波書店、1962年）に挟んである二つ目のしおりのページをご覧ください。この福沢の論稿を読むことができますが、ちょっと目を通して見て下さい。福沢が言っているとは到底思えないことが書いてあります。いろは索引は「便ならず」と評し、「言海始めて世に出でて始めて真成の辞書を見ると云ふも可なり」と、五十音索引を採った『言海』を高く評価しています。

でも、おかしいですね。福沢は「いろは」支持だったのだから。このことをふまえて、当館所蔵の東大国語学研究室が出している『国語と国文学』第5巻第7号（1928年）に掲載されている「大槻先生自伝」をみると、大槻が『言海』をもって福沢を尋ねたエピソードが描かれています。ちょっと見てみてください。福沢は、五十音順になっているのを見て顔をしかめて、「下足札が五十音で行けますか」と大槻に嫌味を言っています。先の『時事新報』の記事では『言海』を褒めているのに、大槻自身が回顧しているところでは、福沢はどうか『言海』の五十音順を歓迎してはいませんでした。どういうことでしょうか？

最近の研究では、『時事新報』の社説に「福沢諭吉記」と書いてある記事は、福沢ではなく、ゴーストライターが書いたのではないかという説があるそうです。この「大槻磐水先生の誠語その子孫を輝かす」は、福沢本人が書いたものではなさそうだが、こうした点からも明らかにすることができます。

V 明治期の言語教科書と文法書：当館所蔵文献より

このスペースでは、当館に所蔵する明治期の言語教科書と文法書をまとめて陳列します。先にも触れたように、教科書は『読書入門』の刊行された1886年以降、いくつかの単語が示された後に五十音図が示されるというスタイルが確立します。ここに並べた、1886年以降に刊行されたいくつかの教科書を手にとりいただくと、そのことがおわかりいただけるのではないかと思います。

また、当館に所蔵する明治期の文法書や語学書もまとめてここに陳列します。五十音図が普及するには、母音と子音という考え方が私たちに根づいていないといけないと思いますが、アルファベットを使って母音と子音を区別して表記することが一般的ではなかった時代（ただし、明治初年には、ローマ字で五十音が表記された掛図も存在します）において、母音と子音をどのように表記したのでしょうか。その苦闘がご覧いただけるとと思います。また本によっては、「父音」という用語も使われています。今の私たちが使わない用語が、どういった意味で使われているのかにも、注目してみると面白いと思います。

おわりに：なぜ「いろは」→「あいうえお」に転換したのか？

「いろは」と「あいうえお」をめぐるミステリーも、その謎は解明されないままなのですが、ここで終わりです。この教科書展は、資料を使ってなにかを「証明」するのではなく、「そういう見方ができる」、ということを試みたつもりです。ある事象をその背後にある歴史的事情と絡めてみることの面白さを、感じ取っていただけたなら、幸いです。

なぜ言語教科書に五十音図が使われるようになったのか？今回は「いろはうた」の衰退と、『言海』の編纂における「いろは」→「あいうえお」の転換に着目しながら、「いろはうた」が積極的に選択されなくなる歴史的事情と、「いろは」に代わって「あいうえお」が優位に立つのは、「教育」の分野だけの話ではなく、同時代的な動きであったことはわかったのではないかと思います。

『言海』の編纂過程と、言語教科書に本格的に五十音図が用いられる過程のなかで、「五十音図」に何があったのかについては、今回明らかにすることはできませんでしたが、「五十音図」が使いやすくなるための時間が、明治初年～1886（明治19）年という、およそ10年間だったのではないかと、最後に伝えておこうと思います。

五十音図は、先に触れたように、国学者によって、天地創造以前から存在したと位置づけられることもあった、非常にイデオロギッシュな、政治的なものでもありました。そういったものを、西洋の学問を意欲的に導入する時期の教科書に採用するには、躊躇するところもあったはずですが、この10年の間に、洋学と国学の折衷した文法書や語学書にも五十音図が使われるようになって、また国学者の地位も低下することによって、五十音図が、まさに日本式アルファベットとして、「単なる規則図表」といえるようになったのではないのでしょうか。もちろん、今回の教科書展で検討した問題だけにとどまらない、さまざまな要因が、「いろは」から「あいうえお」の転換には隠されているのではないかと思います。さらなる研究を継続し、いずれまた、その成果を皆様に披露できる日が来ればと念じています。

本日は教科書展をご高覧いただきまして、ありがとうございました。

【参考文献】

※本文に示したものの以外で、今回の教科書展にあたって参照した、幕末維新时期の教育、神仏分離と廃仏毀釈、五十音図、国学思想などに関する文献を挙げてみました。ゴシックは当館に所蔵のあるものです。

足立巻一『やちまた』（上下）河出書房新社、1974年。

大久保利謙『明治維新と教育 大久保利謙歴史著作集4』吉川弘文館、1987年。

長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』吉川弘文館、1998年。

釘貫亨『近世仮名遣い論の研究——五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会、2007年。

熊澤恵里子『幕末維新时期における教育の近代化に関する研究——近代学校教育の成立過程』風間書房、2007年。

古賀徹「明治維新时期における学校教育と神仏分離——廃仏毀釈と国学思想、教育の近代化との関係に着目して」日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』第59号、2000年。

佐藤秀夫『新訂 教育の歴史』放送大学教育振興会、2000年。

島崎藤村『夜明け前』（第一部上～第二部下まで、全4巻）岩波文庫、1969年。
野口武彦『江戸思想史の地形』ペリカン社、1993年。
飛田良文「いろは順から五十音順へ」『日本近代語研究』3、ひつじ書房、2002年。
望月久貴『明治初期国語教育の研究』溪水社、2007年。
馬淵和夫『五十音図の話』大修館書店、1993年。
安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』岩波新書、1979年。
本居宣長／大野晋編集・校訂『本居宣長全集』第5巻、筑摩書房、1970年。
山口謠司『日本語の奇跡——〈アイウエオ〉と〈いろは〉の発明』新潮新書、2007年。
渡辺哲男「日本における国字ローマ字表記の問題と文字の教育」教育思想史学会『近代教育フォーラム』第13号、2004年。

『国語教科書展—「いろは」から「あいうえお」へ—』

期間 平成24年8月4日（土）～8月10日（金）

午前10時～午後4時

会場 滋賀大学附属図書館教育学部分館 2階閲覧室